

=====  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

=====  
AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2022年度第3回（通算第7回）研究会

日時：2022年11月5日（土）オンライン開催

13:30～15:30

田井みのり「音楽による弔いの現在—現代日本の葬儀を事例として」

15:45～18:00

「死の人類学」についての今後の研究方針についての議論

要旨

「音楽による弔いの現在—現代日本の葬儀を事例として」

田井みのり

本研究の目的は、現代日本の葬儀において、音楽がいかにして、新たなかたちで取り入れられるようになってきているのかを明らかにすることである。日本の葬儀の大半を占める仏葬では、従来音楽的なものといえば、導師が唱え、奏でる、お経や木魚の音であった。それが近年では、CDのみならず、遺族やセレモニープレーヤーと呼ばれる葬儀専門のシンセサイザー演奏家により、ポピュラー音楽を含む多様なジャンルの音楽が葬儀で演奏されるようになってきている。これは、仏教葬などの宗教葬でもみられる一方、無宗教葬において、より音楽を全面に出し「音楽葬」というかたちで行われることもある。

そうした葬儀での音楽の取り入れられ方をみていくと、遺族や葬儀社スタッフ、演奏者により、特定の「故人（個人）」を送るために、ふさわしいだろうとされる曲が選ばれている。特に多い選曲は、故人が生前に好きだった曲や、故人らしい曲、故人との思い出のある曲である。また、故人が生前に、自分の葬儀で流してほしい曲を決めている場合もある。そして、葬儀において、それらの曲が演奏される際には、故人のことや、共に過ごした記憶を鮮明に思い出し、感情が動かされたといった語りが見られる。

最近では、日本の葬儀の傾向として、「個人らしさ」を尊重した、遺族や故人と葬儀社スタッフの双方向的なサービスのあり方が重視されるようになってきていることが指摘されている。そこで、音楽を用いると、選曲ひとつで個人らしい演出をすることが可能となる。しかし、故人らしさを演出し、故人を思い出するための他の演出（例えば故人の愛用していたものを並べるなど）と音楽を用いた演出には異なる点も見られる。

セレモニープレーヤーは、葬儀の演奏のための専門性を有する演奏家である。実際の葬儀

では、それぞれの葬儀にふさわしい選曲に腐心することに加え、式全体を通して 20～30 曲演奏される各曲をどの場面でどのような音量で、どのようなタイミングにより演奏するかを考える。その上で、会場の雰囲気、司会者や遺族の言葉、僧侶の動きなどを感じ取りながら、一体感のある葬儀を目指す。特に花入や出棺といった場面は、印象に残る場面として選曲や演奏の仕方に工夫がされる。

このようにして、セレモニープレーヤーの奏でる音楽は、葬儀の一連の流れに寄り添い、葬儀を共に形作っていく。これについて、儀礼と音楽の形式の相似性が手がかりとし、考察を行った。儀礼も音楽も共に、いわば「物語」ともいえるような一連の時間的な流れ、「形式」により、ある種の感情を喚起し、また普通には知覚できないようなイメージをもたらす。葬儀は、そのようにして死にまつわる感情に対処するための装置、枠組みとも考えられてきた。そこで音楽が、特定の宗教的な内容を持たない、ある種の枠組みとして、現代日本の死に際して個々人に寄り添った「小さな物語」を紡ぎうる可能性について論じた。

## 「死の人類学」についての今後の研究方針についての議論

西井が、これまでの研究の理論的概要の復習のための報告を行い、質疑応答を行った。

### 【研究会概要】

本研究は、身体のマテリアリティを起点として生にアプローチする近年のアフェクト/情動研究から、生と死の境界に焦点化することで、生きる現実を新たな視線から捉えなおし、変容しつつある世界の中における生のあり方への理解を深めることを目的とする。

## I 人類学との関連から—アフェクト的世界による世界見方の根本的転倒

### 1 もの研究との関連

＜もの研究＞との共通点：脱人間中心主義

### 2 身体論との関連

＜マテリアリティとしての身体＞

身体境界の揺らぎ

人間中心主義からの脱却—「社会身体」環境も含めた身体

＜人類学における身体論から＞

身体論からアフェクト論へという流れをみていくと、身体論が身体そのものに焦点化し、そのダイナミズムや他性をみて、社会の考察につなげていくのに対し、アフェクト論は、むしろ個の身体そのものというよりは、集合性や潜在性から個を通して働く力に焦点を合わせているという違いがみてとれる。

## II アフェクト論で積み残した課題

時間性を入れることで、どのように現実を生きているのか[徹底した受動性、生の外部]から、どのように「現在」を生きるのへと、問いが変化する。

時間というのを過去、現在、未来という線的なものとしては考えない。つまり、客観的に過去があつて、現在があつて、未来があると考えるのではなくて、現在がつくりだされた

きに過去と未来が現れると考える。つまり、私たちが生きているのは、身体としての現実というものがあって、そこからはじめてその時間を考える。

次回の第8回研究会（12月17日）では、これらを踏まえて成果論集にむけて各自が研究の概要を発表する。